

西条中学校研究通信

第7号
研究部

9月10日（水）、11日（木）の2日+間、小野先生とともに研修視察に行かせていただきました。9月10日（水）は東京都の中央区立晴海中学校、11日（木）は愛知県の安城市立安城北中学校で学ばせていただきました。両校とも、澤井陽介先生が指導助言に入っていच्छいます。今回は、視察で学ばせていただいたことをまとめてみたいと思います。

東京都 中央区立晴海中学校での学びから

研究主題 「主体的に学習に取り組む態度」の評価改善
～生徒の「意志的側面」を見とる単元計画～

主な研修内容

・研究授業参観

音楽科（1年） 歌詞の内容と曲想を生かした表現を工夫して合唱しよう
国語科（3年） 説得力をもって討論会に臨もう ～晴中青学年サミット2025～
保体科（3年） 水泳

・研究協議 グループごとに授業検討（20分）

・澤井陽介先生による指導講話（約30分）

「主体的」と「自主的」という2つの言葉。とてもよく似ているけれど、意味は違う。「自主的」というのは、決められたこと、やらなくてはならないことを進んで実践すること。しかし「主体的」というのは、やりたいことを自分で決めて実践していくこと。だから、生徒の主体性を見とるためには、生徒一人一人がそれぞれに自分自身の目標を持ちながら授業に参加していなければならない。また、生徒が自ら定めた目標を、どのような方法で到達するのか、見通しも持たせる必要がある。そして、目標を達成するために、学びの過程のどこで、どのように学びの確認や自己調整を図らせるのか、指導者は考えなくてはならない。



グループごとに授業検討する様子

♡春はあけぼの・・・晴海中 Ver.

何よりも生徒の姿。とても落ち着いていて、指導者の話を熱心にうなずきながら聞き、問いかけにもしっかりと反応している。「めんどくさいな」「早く授業が終わらないかな」という表情をしている生徒が一人もいない！びっくりしたのは、3年生の水泳の授業。東京のしかも中央区晴海という土地柄か、校舎は地下1階から6階まであり、その6階に体育館とプールがある。室内プールかと思いきや、天井は開閉式となっており、天井から空と高層ビルを眺めながら、生徒たちは泳いでいた。施設にも驚きだが、やはり生徒がすばらしい。見学の生徒は、たったの3名。その他の生徒は、男女ともにスクール水着で躊躇なく泳いでいる。見学の生徒は、タブレットで泳ぎの様子を撮影し、泳ぎ終わった生徒にすぐさま映像で確認させている。もし、ここが西条中だったら…と考えた。体のラインが^{あら}露わになる水着で、しかもおしゃれではないスクール水着。体調が悪いという生徒が続出するのではないか、水泳の授業があるから登校を嫌がる生徒も出てくるのではないかと想像してしまう。また、廊下ではすれ違う生徒たちの方から、本当に気持ちのいい挨拶をしてくれる。生徒自身と私たちの距離感に応じた声の大きさ。なんでもかんでも元気で大きな声であいさつすればいいってもんじゃないだよ、と晴海中の生徒から教えられたように感じるほどだった。



なぜ、晴海中の生徒はこんなにすがすがしいのだろうか…。その答えは授業後の研究協議が始まって、すぐに分かった。本校の研究協議（Round Study）も活発に議論がなされているが、晴海中もみんな熱心に協議を進めている。しかも、よくありがちな「先生と生徒との関係がよかった。日々のご指導のたまものです。今までどのように指導されていच्छいたのですか？」と言ったような枕詞的な会話は一切なく、例えば国語科の協議では「環境がテーマの討論だが、環境についての知識量が少ないと表面的な質疑応答にしかないよね。討論に深まりを持たせるための手立てが必要だったね。どうすればよかったかな？」などと、おそらく国語科ではない先生方も熱心に自分の意見を述べられている。このように熱心な研究協議、澤井先生の指導講話で研修会が終了したのだが…。研修会終了後、音楽科の授業をされた先生がすぐに私たちのところに來られた。「私の授業で何かお気づきの点はありませんでしたか。ぜひ教えてください。」とおっしゃられる。さらに「私は初心者なので、いろいろ改善しなくてはいいところがあるはず。自分では気づけないところもあるので、ぜひ教えてほしい」と…。なるほど、そうか。このように自ら学ぼうとする先生方がいच्छるからこそ、晴海中の生徒は素晴らしいのだな…。とつくづく感じ、このような学校文化、自己研鑽の風土を西条中でも築かねば…！と感じた1日となった。

愛知県 安城市立安城北中学校での学びから

研究主題 粘り強くチャレンジする生徒の育成
～「選択」と「共有」を核とした学びのデザインを通して～

主な研修内容

- ・研究授業参観
国語科（１年） 季節のしおり 夏
英語科（３年） 絶滅危惧種の動物についてのポスターを作成しよう
道 徳（１年） 遵法精神「仏の銀蔵」
- ・研究協議 グループごとに授業検討（１５分×２）
- ・澤井陽介先生による指導講話（約３０分）

やはり、生徒に提示した学習課題は板書した方がいい。課題をきちんと聞いていても、時間がたつと、課題が何であったか分からなくなってしまう生徒もいるし、課題からズレたことを考えてしまう生徒もでてくる。きちんと目に見える形で課題が提示されていると、課題が分からなくなっても、確認しながら学習を進めることができる。

そして、生徒の学びを「主体的」なものにするためには、いくつかの条件がある。例えば、学習課題に取り組もうとする意欲を喚起するような導入が必要。いきなり課題を提示しても、押しつけになるだけ。そして、生徒一人一人が自分の学習課題（＝めあて）を持つこと。さらに、自らの学習課題（＝めあて）を達成するための見通しを生徒それぞれが持つ必要がある。そのためには、チェックリスト（＝ゴールに到達するための途中過程における小さな目標）を生徒に持たせること。要するに、「意欲」と「見通し」で学習課題をはさみこむような学習の流れをつくればいい。

また、生徒自らの学びの振り返りを大切にしたい。「今日のマイチャレ」と題した振り返りに取り組まれていた先生がいらっしまった。「今日のマイチャレ」では「今日の授業でチャレンジできたこと、そこから気づいたこと、学んだこと、生かしたいこと」を書かせるようにしていた。そのような振り返りを積み重ねていくことが大切である。

ワークシートの扱いも留意する必要がある。ワークシートの流れに沿って授業を進めていけば、大きく脱線することなく、指導したい事項にたどり着くことができる。けれども、授業の進め方が見えてしまうのがワークシートのデメリットである。「この流れで学習すればいいのだな」と生徒が分かってしまうと、生徒は試行錯誤することができなくなってしまう。私たちが生徒に求めたい姿は、「自らのめあての達成に向けて試行錯誤する姿。自問自答する

姿」であるはず。そして、そのような姿が「主体的な学びの姿」であるはず。あまりにもワークシートに頼りすぎてしまうと、主体的な学びにはならないのである。限られた１時間の授業で教えたこと、教えなければならないことがあるから、指導者は、つつい答えやまとめ、概念といったものを出しすぎてしまう。子どもから出させるようにしよう。指導者は生徒が出すまで待とう。生徒が出してきたものに足りないことがあれば、付け足せばいいのである。

子どもたちが活発に自分の意見を出し合う活動はとても大切。しかし、その活動を通して、何を身に付けるべきことは何なのか、学習目標（＝付けたい力）を見失わないようにしよう。話し合い活動はあくまで手段。学習の目的ではないことを忘れてはいけない。

♡春はあけぼの・・・安城北中 Ver.

屈託なく自分の意見を述べ合う姿がいろいろな授業で見られた。特に１年生の道徳の授業。扱った教材は「仏の銀蔵」で内容項目は「遵法精神 C10 遵法精神」。教材を読み進めながら、指導者が生徒に「遵法精神のない登場人物は誰だろうか？」と問いかけ、「さあ、みんなで話し合ってみよう」と言われた瞬間、生徒たちは嬉しそうな顔をして机の向きを変える。「自分の思いを言いたい生徒は立ってごらん」という指示に、たくさんの生徒が起立する。そして一人の生徒が様子を見ながら「僕、いいですか？」と言うと、起立していた他の生徒が「どうぞ、どうぞ」と気持ちよく着席する。そのような姿が話し合い活動中、ずっと行われている。発言力のある生徒だけが話すわけではなく、平等に発言の機会を生徒自身が与えあっている。そして発言の内容がおもしろい。「私は、遵法精神がないのは、お金を借りた人々だと思う。だってこの挿絵に描かれている人々の表情を見てください。証文つづりがなくなって、『証拠を見せろ』とか『お金は返したじゃないか』と言っている人々の嬉しそうな顔。借りたお金を返さなくてもいい状況になった瞬間、こんなにいやらしい笑顔で借り逃げしようとしている。これは遵法精神がないからです。」この生徒の思いの根拠は挿絵だから、根拠としてはいかがなものかとも思うが、生徒たちはこのように楽しく討論している。まだ入学して半年もたたない１年生だけれど、話し合いの進め方はすばらしかった。このように、意見を出し合い、練り合うことで学びが深まっていくのだろう…と改めて感じた１日だった。



中央区立晴海中、安城市立安城北中の先生方の日々の実践、研修に向かう姿は、今後の私たちの参考とすべきものばかりでした。このような機会をいただき、本当にありがとうございました。

